

愛知県(県域)

1 産地の概要

＜対象品目＞イチゴ

＜産地の現状・課題＞

病害虫防除について、化学農薬の使用回数の削減による省力化が求められていた。また、みどり戦略や消費者志向の変化を受けて、環境に配慮した病害虫防除体系の確立に向けた機運が高まっていた。

ハダニ類、アザミウマ類の薬剤感受性低下が問題となっており、化学合成農薬に代わる防除対策が求められていた。

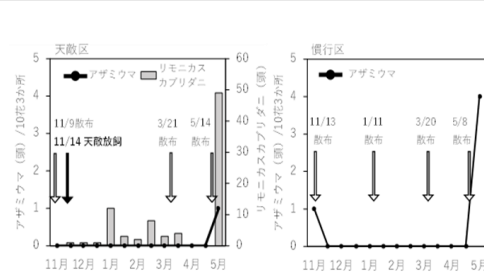
灰色かび病は施設内が多湿となる秋から春に多発する。施設内の温湿度の把握と環境改善が求められていた。

炭疽病は発生後の対応が遅れることで感染拡大する。生理障害や他病害との判別が難しい。発生初期での迅速診断が求められていた。

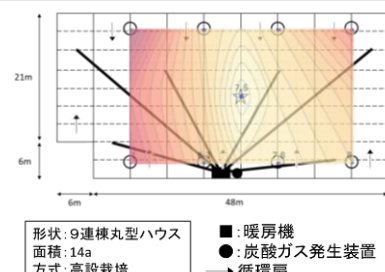
2 検討体制

＜愛知県組織と関係機関の役割＞

- ・農業経営課(役割:事務局)
- ・農業総合試験場 普及戦略部(役割:事業のコーディネート、先進研究等の調査、実証計画、中間・成績検討会・研究会の開催、実証データ、進捗状況の検討および事業実施地域以外での検討、栽培マニュアル及び産地戦略のまとめ)
- ・農業改良普及普及課(役割:JA及び農業者との調整、実証圃の進行管理及び調査、技術指導、先進研究等の調査、検討会、研究会への参加)
- ・農業総合試験場 環境基盤研究部(役割:研究成果の提供、技術指導検討会での助言、研究会講師)
- ・JA(役割:農業者との調整、技術指導・調査補助、データ収集)
- ・生産者(役割:実証圃の栽培管理、技術の検証、データ収集)
- ・JAあいち経済連(役割:資材情報等の提供)



生物農薬等効果試験結果



ICT機器による収穫ほ場の温度むらモニタリング結果

3 グリーンな栽培体系

＜環境にやさしい栽培技術・省力化に資する技術＞

取組項目	作業段階	新たに取り入れる技術
化学農薬の使用量削減	栽培期間全般 病害虫管理	生物農薬等の活用による害虫防除技術

取組項目	作業段階	新たに取り入れる技術
化学農薬の使用量削減	栽培期間全般 病害虫管理	ICT機器を活用した施設内環境の改善による病害発生リスク低減技術

取組項目	作業段階	新たに取り入れる技術
化学農薬の使用量削減	育苗期 栽培前半期 病害虫管理	迅速診断による炭疽病拡大リスク低減技術

4 活動内容及び得られた成果

＜活動内容＞

グリーンな栽培体系の検証、栽培マニュアル、産地戦略の策定、発信

＜実証結果＞

- ① 苗浸漬により処理20日後までハダニ成虫の発生を抑制。
光反射資材とリモニカスカブリダニによりアザミウマ類を低密度に抑制。
- ② ICT機器により施設内の温度湿度の推移とムラをモニタリング。
暖房機のダクト配置や運転周期、内張りの設置方法を調整しムラ改善。
- ③ PCR検査で炭疽病を迅速診断。無症状の株や周辺雑草から検出可能。
潜在感染株の早期除去、除草による感染防止等で感染拡大を防止。

5 今後の展開

生物農薬等を活用した病害虫防除技術、ICT機器を活用した施設内環境の改善、PCR検査の病害の迅速診断の導入に当たり、栽培マニュアルを活用し、県全体の技術向上、化学農薬使用量の削減と省力化を実現する。